

## 正統なる市場、邪道なる市場

藤井 聡

### 虚構の民営化議論

近年の日本の政府は、「小さい政府」を目指し、「官から民へ」の流れを加速化させてきた。この流れは、かつては緩慢に、そして、昨今では世論の強力な支持の下、急速に加速化している。その流れの中で様々な現実の制度改変がもたらされ、一昔前では国鉄や電電公社が、最近では道路関係の四公団が現実には民営化されてきた。そして今では、郵政事業がまさに民営化されようとしている。

こうした近年の流れの背景に潜む平均的な考え方は、次のようにまとめられるであろう。

——政府は、人民に「サービス」を提供するものである。しかし、政府には「競争相手」がない。したがって、政府はサービスの質の向上や、効率性を向上させようとする動機を持たず、したがって、劣悪なサービスを、しかも、非効率的にしか提供できない。ところが、マーケット（市場）の中で活動する民間企業には、「競争相手」が存在する。そうであればこそ、民間企業には、効率化やサービス向上の動機が自ずと生じる。かくして、政府の様々な機能を

民営化することで、人民は、良質なサービスを安く手に入れることができる。そうであればこそ、「官から民」への流れを促進し、政府を小さなものにする「こそ」「善」なのである。

こうした議論は一見、一定の妥当性があるかの様に見える。確かに、政府は人民にある種のサービスを提供する機能を持つ。そして確かに、政府には競争相手がおらず、そしてそれ故に、民間の方が良質のサービスをしかも安価に提供できることもある。

しかし、この議論を正しいと結論づけるためには、次のように非現実的で、かつ極端に強い前提が必要であることを見過ごしてはならない。

第一に、政府は人民にサービスを提供する機能「だけ」を持つ。

第二に、人、あるいは、組織は、競争相手がいなければ、「必ず」努力しないものである。

第三に、競争相手がいれば、「必ず」良質のサービスが提供される。

こうした前提のそれぞれは、それが「偽」であることをいさち論証することすらはばかられる程に、偽である事は明白である。

政府は人民にサービスを提供する機能だけを持つのではないし、人や組織が競争相手などいなくても努力することは十分にあり得る。そして、競争相手がいたところで必ずしも良質のサービスが提供されるわけでもない。

すなわち、こうした「民営化議論」は、論理的に破綻しているのである。

それにも関わらず、ビジネスマンがたむろするあちこちの盛り場や家庭の茶の間、新聞、テレビ、そして、政治の中心地たる議会や様々な行政の官公庁に至るまで、あらゆる所で大まじめにその正当性が主張されている。

すなわち、民営化議論は「論理」を踏まえて議論されているのではなく、「気分」として語られているにしか過ぎないのである。

その気分は何かと問うてみれば、福沢諭吉が唯一役に立たぬ害しかもたらさぬ感情と喝破し、ニーチェがルサンチマンと呼んで嘔吐する程に嫌悪した、大衆の大衆ならざるものへの「妬み」から立ちのぼるもの、もしくは思えぬものなのである。この一点を踏まえるだけでも、オルテガが二十世紀前半に憂いたヴァルガリティ（俗悪根性）に支配された「大衆化社会」が、彼の祖国たるスペインから遙か離れた極東の地にて、半世紀以上の年月を経てめでたく完成しつつあるのだと認めざるを得ないのである。

### 正統なる市場

さて、このほど「民営化」した道路関係四公団や、これから民営化するであろう郵政事業の今後を考えるにあたって重要となるのは、先に

述べた第三の前提に関わる問題である。すなわち、競争相手がいれば、「必ず」、良質のサービスが提供される訳ではない、という点である。

いわゆる経済学では、市場で良質のサービスが提供できない事態は、「市場の失敗」と呼ばれている。そうした「市場の失敗」が生ずる典型的な原因として一般に議論されるのは、「独占」や「情報の非対称性」である。「独占」の問題とは、一部の企業が市場を独占すれば競争がなくなるが故に市場で良質のサービスを提供することができなくなる、というものである。一方、後者の「情報の非対称性」の問題とは、企業は自らにとって都合の悪い情報を隠蔽することが可能であるが故に、消費者に良質なサービスが提供されなくなる、というものである。市場の有効性を信じて疑わないエコノミスト達は、こうした問題点を踏まえつつ、市場における独占をすべからず禁止するための制度や、透明性を保証するための制度の必要性をそこかしこで論じている。

しかし、市場で必ずしも良質なサービスが提供されない最も本質的な原因は、独占や情報の非対称性といった点に求められるのではない。それは、全く別の観点に求められるべきものなのである――。

される事が多いが、十八世紀当時に、アダムスミス本人も含めて一般に代表作とみなされていたのは、「道徳感情論」なる著書であった。この著書は国富論以前に出版されたものの、彼の生涯において幾度もの改訂が加えられ、最終的な改訂版は初版の二倍の分量にまで至っている。この道徳感情論でアダムスミスが指摘しているのは、感情の社会的承の重要性である。例えば、ある人がある物を欲しいと考える場合、その人以外の誰しもが、その「欲しい」という気持ちに共感出来る場合においてのみ、その欲しいという気持ちが社会的に承される。無論、多様な人間が共存する社会の中で、そうした感情の共有を形成することは必ずしも容易ではない。しかし、我々が歴史を継承する能力さえ携えているのなら、ひとり一人の生涯を超えた長い時間をかけつつ、感情が共有される事態が招かれる可能性が浮かび上がってくる。すなわち、感情の社会的共有は、歴史の共有と伝統の精神によって具現化しつるのである。かくして、歴史を共有し、伝統の精神を携えた庶民が構成する市場であるのなら、社会的に承されつる安定的な感情に基づいて様々な品物や「もてなし」が選択されることとなる。こうした市場であるのなら、庶民が自らの感情に基づいて生活しているだけで、社会的に望ましい活動を続けている企業のみが競争を勝

ち抜き、評価され、利益を上げることができることとなる。こうした企業はいわば「正統なる企業」と呼ぶことが出来よう。その一方で、自社の利益だけを追求し、意図的に市場における競争を勝ち抜こうと躍起になる企業は、逆説的にも競争に敗れ、利益を上げることができなくなる。こうした企業はいわば「邪道なる企業」とでも言うべき代物である。

正統なる企業が評価され、邪道なる企業が淘汰される市場――、それこそが、アダムスミスが想定した「市場」に他ならない。そうした市場においてのみ、「神の見えざる手」によって、庶民も企業も、効用（満足度）と収益を最適化することができるのである。

しかしそれとは逆に、邪道なる企業が評価され、正統なる企業が淘汰されてしまつ事態が生じたとするなら――。その時こそ、我々は、真の意味での市場の失敗が生じたのだと断ぜねばならない。なぜなら、その市場は明らかに、伝統の継承を、そして伝統に胚胎するかもしれない真なるもの、善なるもの、美なるものを伝達し継承することに、失敗しているからである。

### 正統なる市場への道のり

もしも昨今の民営化論者が、「正統なる市場」を想定し、その上で「官から民へ」と主張して

いるとするなら、それは誠に結構なことである。

しかしながら、その様な楽観的な見通しはほとんどおきりめねばならぬだろう。国民や庶民を「消費者」と呼び、その消費者の権利なるものの必要性を声高に叫ぶ一方、利益を追求することのみが企業の目的なのだと云ってはばからない論者において、そうした歴史感覚が宿っていると楽観することはほほ絶望的だからである。彼らの望み通りに「官から民」への流れを推し進めれば、政府の諸機能は「失敗しかもたらさぬ市場」へと放り込まれ、その民営化は一つ残らず「失敗」することとなってしまつてある。憂鬱な見通しではあるが、おそらくはそれが、最も信憑性の高い日本の近未来像である。

しかし、パンドラの箱の最後に残されたものが希望であつたように、我々にも幾ばくかの希望が残されているのではないかと期待することは出来るのではなからうか。

ふと昔を思い起すなら、例えば、筆者の子供の頃、筆者の身のまわりの者は皆、近所の商店の集まる場のことを「いちば」(市場)と呼んでいた。筆者も我が家の大人達も、その「いちば」の店主とは顔見知りであつた。子供の筆者には退屈きわまりない時間であつたが、毎日、彼らと我が家の大人とはあれこれと会話していた。つまり、「いちば」は当時の大人達の社交の場として機能していたのである。そしてそこに

は、ゲームセンターもパチンコ屋もなかつた。そこで取引されていたものはいずれも、安定的な感情があれば自ずと求められるであろう社会的に了承された品物と「もてなし」であつたように思う。

しかし、ほどなくすると我が家の近くから「いちば」は消え、我が家の大人達は「ジャスコ」に通うようになった。そこにはハンバーガー屋があり、アイスクリーム屋があり、そして、ゲームセンターがあつた。筆者が想像していた都会の匂いなるものがそこにはあつた。筆者は、田んぼの中にそびえ立つ、その白いビルを見上げながら、どことなく誇らしい気持ちになつたことを覚えてる。

しかし、当時の筆者は気付いていなかった。筆者には退屈な時間にしか過ぎなかつた我が家の大人達と店主との間の無駄話の時間と共に社交の場が無くなつてしまつたことを。そして、新しくやつてきた「ジャスコ」にてやりとりされている財やサービスの中には、安定的な感情の発露として求められているとは必ずしも言えないものが含まれていたことを――。

それから三十年近くの時間が流れ、数年前に東京に越してきた時、筆者の郷里ではほぼ消え失せていた、かつて子供の頃に感じていた「いちば」の匂いが、東京に僅かなりとも残されていることに軽い衝撃を覚えた。皮肉にも、それ

なりの時間をかけて「近代」に冒されてきた都会の方が、近年急激に「近代」に冒された地方部よりも、前近代的なる伝統の匂いを残すことに成功していたように思えた。

ただし、都会の中に残された前近代的なるものも、少しずつではあるが減退しているようにも感じられる。東京に越してきてからわずか数年の間に、筆者が個人的に好んでいた商店やレストランが、少しずつではあるが確実に無くなる商店、マクドナルド的なレストランが少しずつ増えてきている様に思う。

こうした印象は、いずれも筆者の単なる思い過ごしなのかも知れない。

しかし、もしも筆者の印象に幾ばくかの妥当性があるとすると、我々の身の回りには、未だ前近代的なるものが残されていると考えることは必ずしも誤りではないといつこととならう。だとするなら、我々は、自らの精神の中におぼろげに胚胎しているかも知れぬ伝統に裏打ちされた良識の目を僅かなりとも見開きながら、我々の身の回りの中から、社会的に、そして歴史的に了承される品物と「もてなし」を選択することができるのではなからうか。もしも、そうした試みが功を奏するなら、それぞれの地にて市場の失敗は回避され、邪道なる企業を淘汰し正統なる企業が評価される健全なる市場が

おぼろげにでも立ち現れることとなるのではな  
かるうか。そして、前近代的なるものの活力が、  
各地にて僅かずつではあるが確実に向上してい  
くこととなるのではなかるうか。

言つまでもなく、その道のりは気が遠くなる  
ほどに遠い。

しかし、それは意外と楽しいものなのかも知  
れない。

なぜなら、その道のりの過程において我々が  
手にするものは、つましやかではあるとして  
も、安定した良質の満足であるに違いないから  
である。それは、アダムスミスが語った見えざ  
る手を操る「神」からの、我々に対する贈り物  
なのかも知れない。